

令和 2 年 6 月 18 日現在

機関番号：32685

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K02359

研究課題名(和文)シェイクスピア・フォリオの書き込みに見られる17世紀の読書スタイル

研究課題名(英文)The seventeenth century readers' marginalia: How they read/used Shakespearean Folios

研究代表者

住本 規子 (SUMIMOTO, Noriko)

明星大学・人文学部・教授

研究者番号：10247174

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：現存するシェイクスピア・フォリオに残された17世紀当時の読者による書き込みを可能な限り実際に関連調査することで、17世紀の読書スタイルの特徴を一定の精度で明らかにしました。その結果と照らし合わせることで、明星大学所蔵のファースト・フォリオ(MR774)に見られる1630年頃の読者の書き込みを相対化し、このユニークなコピーの書き込み者の読書スタイルの理解を深めました。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は学問的には書物史、読書史、とりわけ、初期近代のシェイクスピア受容史にとって、実証的研究としての意義が大きい。書き込みの転写資料の公開が進めば、より貴重な基礎資料を提供することになる。社会的には、人の営みにおける文学の果たす役割とその持ち得る意味という時代を超えた普遍的テーマを、歴史的にたどることで、「今」を理解することに寄与するという意義が見いだせる。

研究成果の概要(英文)：By examining as many copies of Shakespearean four folios with annotations inscribed by 17th century readers/users as possible, this study has found several characteristics which seem to be there in common among them and constructed a provisional context of the 17th century readership. This provisional context, in turn, has made it available to contextualize the unique example of the reading style the Meisei Copy of the First Folio (MR774) exhibits.

研究分野：英文学

キーワード：シェイクスピア フォリオ 読者 書物 書き込み マテリアル・テキスト研究 受容史

1. 研究開始当初の背景

(1) 動機：明星大学図書館所蔵シェイクスピア・ファースト・フォリオ (MR774) は、17 世紀の読者によって書き込まれたと考えられている夥しい分量の書き込みを持つ他に類をみないコピーとして有名である。例として図 1 に *Hamlet* 5 幕 1 場「墓堀の場」(Sig.pp5v) の書き込みを示す。



図 1 MR774 Sig.pp5v 明星大学図書館所蔵

本コピーについては、すでに Yamada Akihiro, ed. *The First Folio of Shakespeare: A Transcript of Contemporary Marginalia in a Copy of the Kodama Memorial Library of Meisei University* (雄松堂, 1998) が書き込みの転写を含めた研究成果を出版・公開しており、そのデータの提供を受け製作された *Meisei University Shakespeare Collection Database* (<http://shakes.meisei-u.ac.jp/e-index.html>) にてその各頁を見ることができるので参照されたい。長短の下線（実は上線）というマーキングと上下の欄外に書き込まれた言葉による書き込みが「1620 年代から 1630 年前後」のものだとする Yamada 説は現在学界の定説となっている。MR774 の事例のような、シェイクスピア没後比較的すぐの読者たちのフォリオの読み方、使い方はほかにはどのような事例が残っているのだろうか、それを探し出して MR774 を相対化したいというのが、この研究の出発点となっている。

(2) 学術的背景

シェイクスピア・フォリオの現存コピーに残された読者による書き込みの研究：明星コピー (MR774) の研究書 (1998) の編著者、山田昭廣氏が、『シェイクスピア時代の読者と観客』(2013) の中で、同コピーからの *The Tempest* と *Henry V* の書き込みを含むいくつかの書き込み例を取り上げて論じており、本課題の成果を発表する際の形式上の可能性を示唆していた。なお、Rasmussen and West, *The Shakespeare First Folios: A Descriptive Catalogue* (2012) が現存ファースト・フォリオのマージナリアの記録を、正確さと網羅性については使用上注意が必要ではあるが、情報提供したので、ファースト・フォリオについては、どのコピーを実地調査の対象にすべきかの判断をよりの確に下すことが可能になった。

シェイクスピア研究におけるマージナリア研究：William H. Sherman の *Used Books: Marking Readers in Renaissance England* (2008) により初期近代イギリスにおけるマージナリア研究に理論的枠組みが与えられたあと、シェイクスピアの読者マージナリア研究も徐々に盛んになってきている。

本研究代表者が 2011 年～2014 年に行った課題「シェイクスピア・フォリオの書き込みに見られる読者像」(課題番号 23520333) では、現存するコピーに残された読者の書き込みを、18 世紀におけるシェイクスピアをめぐる出版、上演、ジャーナリズムなどの資料とつぎあわせて解析を試みた。主な成果として、ボドリアン図書館所蔵のセカンド・フォリオ (Arch.Gc.9) の事例研究を深めたことがあげられよう。Arch.Gc.9 の所有者 / 読者は、口本参照型の書き込みに着手する前に当時の(改作)上演テキストという「最新版」により自己所有のフォリオ本のアップデートを試みていたのである。2 段階を踏んだアップデート作業の実態がインクの色の違いから明らかになった Gc.9 の事例は、オリジナル・シェイクスピアより最新版(改作)を重視したとする 18 世紀初頭のシェイクスピア受容をめぐる文化モデル (Robert D. Hume, “Before the Bard: ‘Shakespeare’ in Early Eighteenth-Century London,” *English Literary History* 64 (1997), 41-75) をまさに例証するものであった。この課題の最終年度に Glasgow 大学のファースト・フォリオの書き込みを実地調査した際、書き込み者が 17 世紀の人物という点では明星コピー (MR774) と同じだが、書き込み自体はまったく性質を異にしていることに実物を前にして衝撃を受けた。文学批評につながることをほとんど残していない明星コピーに対して、

Glasgow コピーは *The Tempest* に“very well” (Sig. B4)、*Two Gentlemen of Verona* に“starke naught” (Sig. D1v)、*Merry Wives of Windsor* に“very good, light” (Sig. E6v) さらには *Much Ado about Nothing* に“bon fort bon” (Sig. L1)、と評価を下していることにあきらかなように、戯曲あるいは文学について語りなれた人物の存在を感じさせる。一方で Glasgow コピーでは、ことばが書き込まれることはむしろ少なく、ほとんどは“ap:”を添えての下線だけが書き込まれている。‘ap’が“Book of the Month, July 2001, Shakespeare: First Folio” (<https://www.gla.ac.uk/myglasgow/library/files/special/exhibns/month/july2001.htm>) 以来、広く指摘されているように‘I approve’の意を表すラテン語の短縮形であるならば、下線は優れた表現、重要と思われる表現などに施されたとみてよいのではない。

明星コピーの下線はほとんどすべての行に施されているため単純にグラスゴー・コピーの下線事例と比較するわけにはいかないが、書き込みの言語情報と組み合わせるデータ処理を行えば、比較は可能になるのではないかと。この気付きからマーキングにも注目した書き込みの読解をととした 17 世紀当時の読書スタイルの解明という本課題の着想に結びついた。

2. 研究の目的

本研究は、現存するシェイクスピア・フォリオに残された初期近代、特に 17 世紀の所有者 / 使用者による書き込みを読み解くことで、当時の読書行動の実相に迫ろうとするものである。書き込まれたことばだけでなく、下線、星印、マニキュール等のマーキングにも注目してこれを行うことにより、これまでの研究で詳細研究の対象としてこなかったフォリオの書き込みをも新たに研究対象に取りこみ、得られたデータを明星コピー(ファースト・フォリオ MR774)の書き込みデータと比較することで、明星コピーの所有者 / 読者が行った読書スタイルの相対化を試みる。

3. 研究の方法

(1)書き込みのあるフォリオの現地調査

(2)文献調査

研究論文、研究書の探索を大きく分けて 書物史、インテレクトチュアル・ヒストリー、マテリアル・テキスト研究の領域と シェイクスピアに特化した読者研究の領域の 2 つの領域について行い、17 世紀の読書スタイルを解き明かす上での示唆を与えてくれる情報の収集にあたった。

(3)国際交流：広く実際にフォリオに当たっての研究は国内ではほとんど類を見ないため、国際交流によって情報共有や理論の発展を図る必要があった。その目的で以下の機会を創設あるいは活用した。

World Shakespeare Congress 2016 への参加

国際シンポジウムとワークショップの開催 (明星大学、2016 年)

日本シェイクスピア学会におけるセミナー主催 (東京、2016 年)

Folger Shakespeare Library における短期滞在 (2019 年)

4. 研究成果

(1) 書き込みのあるフォリオの閲覧およびページ画像採取：9 つの図書館で行った。フォリオの版 (F1~F4) と冊数は以下の通りである。パドヴァ大学図書館：F1x2 ヴェネツィア国立マルチャーノ図書館：F2x1 ニューヨーク公共図書館：F1x2, F2x10, F3x3, F4x4 ニューヨーク公共図書館バーク文庫：F1x1, F2x2, F3x2, F4x2 モーガン図書館：F1x2, F2x3, F3x2, F4x2 フィラデルフィア自由図書館：F1x1, F2x1, F3x1, F4x1 シェイクスピア・センター図書館(ストラットフォード・アポン・エイヴオン)：F1x1, F2x6 (うち 1 冊は非完全本), F3x4 (うち 2 冊は非完全本) フォルジャー・シェイクスピア図書館：F1x5, F2x14, F3x3, F4x5 (オンライン・カタログで 17 世紀の書き込みがある可能性が高いと判明したコピーを中心に選んで調査した) アメリカ議会図書館：F1x2, F2x1, F3x1, F4x1

以前の研究課題 (19520266、23520333) 以来分析を続けてきているボドリアン図書館所蔵の F2 (Arch Gc9) とグラスゴー大学図書館所蔵の F1 (Sp Coll BD8-b.1, West 11) に続き、本研究で新たに発見できた特に重要と考えられるターゲット・コピーとしては、パドヴァ大学図書館所蔵の F1 (RARI NOVA SERIE 1, West 198)、フィラデルフィア自由図書館所蔵の F1 (West 179)、ヴェネツィア国立マルチャーノ図書館所蔵の F2 (RARI 139)、フォルジャー・シェイクスピア図書館所蔵の F1-54 (STC 22273 Fo.1 no.54, West 112) および同 F1-73 (STC 22273 Fo.1 no.73; STC 22273 Fo.1 no.73 Fragments, West 131) などが挙げられよう。

(2)国際シンポジウムとワークショップの開催：2016 年 10 月 2 日 (日) 12:30~16:30 明星大学にて、CNRS の Jean-Christophe Mayor 氏と京都大学の廣田篤彦氏の協力のもと、また、明星大学貴重書コレクション展第 3 回企画展「シェイクスピアこそ人生だ。」共催という形で図書館からの支援・協力を得て、“A Celebration of Shakespearean Readership: Exploring and Experiencing the Most Annotated Early First Folio in the World (Meisei University's MR774)” と題してシンポジウムを開催した。第一部では明星コピーの書き込みをジャンルごとに解説紹介する 3 本のトークセッション(研究代表者は喜劇を、廣田氏は史劇を Mayor 氏は悲劇を担当)

を行った。研究代表者のトーク“Exploring the Comedies”では、MR774の書き込み者が喜劇をどの様に読んだか、喜劇に残された書き込みをいくつかの作品を取り上げて分析を試みた。

講師たちのトークのあと、聴衆を小グループにわけ、それぞれ、(明星大学創設50周年記念に制作された)MR774のレプリカ版のページを繰りながら、「The Commonplace-book of the Dayを作る」と題して、シェイクスピア作品から記憶にとどめていることをポスターにして共有するワークショップを開催した。ワークショップは、17世紀にフォリオに書き込みをした読者を身近に感じ、かつ、現代人どうしてもシェイクスピアのテキストを介して共通点や異なる点を共有し人間についての理解を深めあうことが可能なのだということに思いをいたすよい機会となった。ファシリテーター役の院生、学生諸君ともども、40名あまりの熱心なシェイクスピア・ファンからなる参加者(主として近隣の一般の人々)に恵まれ、読者の営みを意識化する意味深い体験を共有できたことは参加者にも好評であったし、もとより研究代表者はじめ協力を仰いだ講師たちにとっても誠に喜ばしい体験となった。有意義な社会貢献となったと思う。

(3)World Shakespeare Congress 2016におけるセミナー“*Hamlet*, 5.1: The Gravediggers' Scene” (lead by Atsuhiko Hirota and John Lee, 1 August, at 3.45 to 5.15 pm in the Wolfston Hall, Shakespeare Centre)に参加した。研究代表者は、MR774の読者が当該場面を、一行一行印をつけながら読み進めていった軌跡を、ミニ・ライフストーリーとして描き出すセミナー・ペーパーを提出した。このライフストーリーという方法は、MR774のような事例で読書スタイルを分析するのにかなり有効であるという感触を得た。

(4)シェイクスピア・フォリオの書き込みに見られる17世紀の読書スタイル

本研究期間内に見つかった17世紀読者の書き込みにみられた要素のうち主なものは、登場人物表の作成、場所の設定(Scene location)、SPやト書きの修正および拡充、テキストのミスプリントの修正、校訂、作品評価(寸評など)そして、コモンプレイングであった。

コモンプレイングは特に顕著に見られた読書スタイルであった。情報それ自体にしる、伝達のための言語表現にしる、これはというテキストをコンテキストから切り離して採取・分類・収集し、自分の文書作成時に活用する、という一連の知的作業が初期近代において情報処理ひいては学問の進歩を促進するとして推奨されてきたことは、Ann M Blair, *Too Much to Know: Managing Scholarly Information before the Modern Age* (Yale UP, 2010)に詳しいとおりである。17世紀の読者によるフォリオへの書き込みには、コモンプレイング作業の痕跡と理解することが最も相応しいマーキングが多様な形をとって頻出していた。

筆記用具についての気づき：本研究期間中に黒、赤、青の鉛筆の使用について、それらが、17世紀中にすでに使われていたことが確認できた。

初期近代における書斎/居間のフォリオの用途、あるいは、初期近代におけるシェイクスピア・フォリオの受容と需要についての仮説：研究期間をとおして調査した書き込みのあるフォリオでは、全作品に渡って書き込みが残されている例は稀で、一部の作品、一部のページのみに熱心な書き込みがされているといった状況のコピーが多く見られた。余暇を楽しむ読書においては、そのような不規則性は当然だという議論もある。また、一方でシェイクスピア劇を読むのにフォリオ本は快適な環境として選ばれる本と言えるのだろうか、という疑問もある。Ann M. Blairは、書き込みの出現状況を観察することで、読者がページ順に読んでいった sequential reading を行っていたのか、参照目的で当該部分だけを読む consultation reading を行っていたのか推測できるという趣旨のことを示唆している(*Too Much to Know*, p.248、住本・廣田・正岡訳『情報爆発』pp.305-06)。シェイクスピア劇のような文学テキストの読み方と学問のテキストの読み方を同列に論じることはできないであろう。しかし一方で、明星コピーの読者が情報を列挙する enumeration が行われている一節に対して特別な関心を抱いて抜き書きをしている事実も観察される。まるで事典的情報を収集しているかのような書き込みなのである。これは、劇世界に浸って楽しむという読み方だけがシェイクスピアの読み方だったのではないことを示唆しているのではないだろうか。人間の喜怒哀楽や他者との関係性とそれにともなう感情、あるいは個人と社会との軋轢といった人生に出来しうる苦難や至福とそれを表現することばを欲するとき、人々はシェイクスピア・フォリオに赴いたということもあったのではないだろうか。事典類のように書斎/居間の書架のおなじみの位置に置かれたその本は、通常相応しく重厚に装丁され個人の寿命を越えて代々、一族のメンバーに寄り添い続けたということも少なくなかったはずだ。索引はないが、文学テキストならではの強みで、探している表現が見つかりそうなシチュエーションが、何という作品のどのあたりにありそうかという目星を付けることのできたユーザーは、多かったのではないだろうか。いささか大部ではあるが、一冊取り出すだけでシェイクスピアから期待する表現や人間情報はすべて「検索」可能であり、見開きで260行程度のテキストが一望できるこの本は、初期近代にあってはこうしたニーズに見事応えていたと考えてもそう間違いではあるまい。

明星コピーの読者/所有者が行った読書スタイルの相対化：マーキングとことばによるマージナリアという組み合わせ総体で見るとユニークと言わざるを得ないが、マージナリア(が抜き書きをしたテキスト)のコンテンツから仮に事典的情報を含めたコモンプレイングと登場人物批評を含めたプロットサマリーの2つに分類してみると、その読書スタイルは17世紀読者が残したほかの書き込み事例に比べてプロットサマリーの部分にユニークさが際立つ。ちなみに、

Hamlet のケースでは、コモンプレイングが約 58%、プロットサマリーが約 42%という割合であった。プロットサマリーは、劇作品をはじめて読む読者であれば時代を問わず読書中に確認していく作業の反映であり、メモが後世にまで残る点のみが稀有な例と言える。今日の文学の学生がシェイクスピアの戯曲を「学ぶ」際の作業と大差ないのかもしれない。

ただし、～の結論には限界が否定できない。調査したサンプルは以前の課題時に収集できたものと合わせても、地球上に現存するコピーの極一部にしか過ぎないことは明らかだからだ。ファースト・フォリオについては、書き込みの概要であればほぼわかっているが、概要ではなく正確な転写資料や全頁画像が揃わなければ、本研究課題にとっては、まだまだわからないことが多い。セカンド・フォリオ以下のフォリオについては、この研究期間終了時点では、現存総数や実態の把握にははるかに程遠い状況と言わざるを得ない。ただ、インターネット上で、そうした試みが始まる兆しは見えてきている。世界の研究者や図書館の効率よい協力体制が構築されることを期待したい。

(5) 研究を振り返って

当該分野における本研究の学術的な特色・独創的な点及び得られた結果と意義について記すとすれば、それは以下のようなことになろうかと考える。シェイクスピア受容史を考える上でフォリオの書き込みを情報基盤とし、さらにことばだけでなく、下線、星印、マニキュール等のマーキングにも注目した点で独創的である。また、書き込みの転写という研究の基本的資料を、現時点ではまだごく一部にとどまっているが、整備、提供したとともに、シェイクスピア受容史に18世紀の版本参照型の書き込みとは違う、17世紀の読書スタイルという具体的な光をあてることができたことは本研究の意義と考える。明星コピー(MR774)が示す個々の作品における読書行動を明らかにすることで、明星コピーの書き込みが現代読者のシェイクスピア読みに影響を与える可能性も見えてきた。しかし、研究期間中に収集できたフォリオへの書き込み情報は、予想をはるかに超えて膨大な量となり、残念ながら期間内での分析終了は不可能であった。すべてを有効に研究に活かすためにこれからも本課題を追求していく所存である。以上。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Sumimoto, Noriko	4. 巻 10
2. 論文標題 "A Seventeenth-Century Folio Reader Reading _Hamlet_, 5.1: The Gravediggers' Scene"	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Meisei International Studies	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 住本 規子	4. 巻 8号
2. 論文標題 グラスゴー・コピーの書き込みの特徴ーThe Two Gentlemen of Veronaへへの書き込みの転写とともにー	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 明星国際コミュニケーション研究	6. 最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 住本 規子	4. 巻 12号
2. 論文標題 「ケアリ家のファースト・フォリオ」グラスゴー・コピー再び The Merry Wives of Windsor、Much Ado about Nothing、Love's Labour's Lost、A Midsummer Night's Dream、As You Like It への書き込みの転写	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Meisei International Studies	6. 最初と最後の頁 1-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Noriko Sumimoto
2. 発表標題 "A Seventeenth-Century Folio Reader Reading the Gravediggers' Scene"
3. 学会等名 2016 World Shakespeare Congress, Seminar "Hamlet, 5.1: The Gravediggers' Scene"（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 住本 規子
2. 発表標題 グラスゴー大学所蔵ファースト・フォリオに見る初期読者の書き込み
3. 学会等名 第54回シェイクスピア学会
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 アン・ブレア著、住本規子、廣田敦彦、正岡和恵訳	4. 発行年 2018年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 446ページ
3. 書名 情報爆発-初期近代ヨーロッパの情報管理術	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考